



隣に住んでる爆乳JOと
仲良くなってH三昧。

その日、仕事を終えて帰ってくると隣の部屋の前に女の子が佇んでいた。
その部屋に住んでる子で、きれいな金髪に青い目。
「あの前後の小柄な身体に…金髪と同じぐらいひときわ目を引く大きな胸。
着ているのは近所の△学の制服だった。
僕が階段を上がってきたのを見ると一瞬顔を上げたが、またすぐにうつむいて
しまった。」

今まで話したことともなかったが、どうにも気になってしまったので声をかけて
みた。

「どうしたの？お母さんとケンカでもしたの？」

「え…」

急に声をかけられて驚く女の子だったが、沈んだ表情で事情を話してくれた。

「鍵落としちゃって…入れないの」

「そうだったのか…」



たしかこの子は母親と二人の母子家庭で、日付が変わる頃に母親が帰ってくる音をよく聞く。それまで待っているとしたらまだ5時間近くは待たないといけないだろう。もうすでに何時間も待っているだろうし。

「じゃあ、お母さんが帰ってくるまで僕の部屋で待ってる？ 何時間もここで待ってたら大変でしょ」

「え？」

急な申し出にまた驚く女の子。

「いいんですか？」

「うん、ほら入って」

ドアを開けて部屋に入ると遠慮がちに女の子が付いて入ってくる。

「お邪魔します…」

女の子の名前はアリスちゃん。その夜はアリスちゃんにも晩御飯をごちそうしてTVを見たりおしゃべりしたりして母親が帰ってくるまで過ごした。アリスちゃんはいつも家では一人で寂しかったらしく、僕もまあ同じなので来たかったらいつでも来ていいよと言ったらほとんど毎日いっしょに過ごすくらい仲良くなった。

アリスちゃんのような可愛い子にお兄ちゃんと呼ばれて懐かれるのは悪い気分ではなく、楽しい日々を過ごしていた。しかし…



それは、アリスちゃんと知り合って2週間ぐらい経った日のことだった。
僕の部屋ではなく、アリスちゃんの部屋の方へお邪魔していつものように一緒に
夕飯を食べ、並んで座ってテレビを見ていた。
アリスちゃんの私服はゆったりしたものが多く、今着ている服も肩を露出させた
だぼだぼ気味の上着で胸元までの白い肌が露わになっていて、

上から見下ろすと胸の谷間がよく見えてしまう。
なるべくアリスちゃんの方は見ないようにしながらも、魅惑の膨らみをつい
チう見してしまうのだった。

まだ△学生なのにこんなに大きいおっぱいしてるなんて血のなせる業だろうか。
しかもブラはしていないらしくインナーだけで支えられたおっぱいは
アリスちゃんが動かたびによく揺れて非常に目の保養：いや、目に毒だった。



夜の9時を回ったあたりでアリスちゃんがうとうととし始めて時々頭が揺れる。
「アリスちゃん、もう寝たほうが良くない？」
「んっ……これ見たら寝る……」
今見ているのはアリスちゃんが毎週楽しみにしている番組で、どうしても
それだけ見たかったようだ。



が、暫く頑張っではいたものの気がつけば隣から寝息が聞こえてきた。
「ああ…やっぱり寝ちゃったか…」
しようがないので、隣の部屋に失礼して布団を見つけて敷くとアリスちゃんを
抱えて運ぶ。



ぐっすり寝ているアリスちゃんを布団に乗せて一息
ついたとき、それが目についてしまった。
寢息に合わせて上下する胸。△学生にあるまじき
サイズのそれは、横になっても大きな隆起となって
その存在を主張していた。

しばらく魅入られたように
見つめている間にとんでもない
考えが沸き起こっていた。
このおっぱいを触ってみたい。

「ばか、なに考えてんだ……でも……」
アリスちゃんは一度寝るとなかなか起きないようで、
前もそうだったし今も運んで寝かせるまで身じろぎ
ひとつしない。
もう一度大きな胸を凝視し、ごくりとつばを飲み込むと
気がついた時には手が伸びていた。



上着を恐る恐るずりさげ、インナーを
捲り上げると綺麗なピンク色の乳首の爆乳が
露わになる。

「こゝれが：アリスちゃんのおっぱい…」
初めて見るナマ乳それも爆乳△学生の想像以上の
破壊力に暫し動きが止まったが、もちろん見るだけで
終わる訳がない。



「お…これが…」
おっぱいの形に沿えるように手を重ね、ゆっくりと
力を入れると柔らかな肉の感触と弾力が感じ取れた。
「さ…触ってしまった…これがおっぱい…!」
ぐにぐにと次第に揉みしだく手に力がこもる。

はつきりとおっぱいの形が
変わるほど強く揉んでも
アリスちゃんの寝息は変わらない。

行為はどんどんエスカレートし、
こねて揺さぶるような動きで初めて触る女子△学生の
手のひらに余る生のおっぱいの感触を存分に楽しんだ。



そしていよいよ乳首に口を近づけ、思いっきり
吸い付いた。

「ん…んう…はあ、はあ…これがおっぱいの味…っ」
ちゅうちゅうと音をたてて乳首に吸い付き、舌で
舐め回して思うさま楽しむ。

左のおっぱいから顔を離すと
今度は右側のおっぱいも同じように
舐めまわし、乳首に吸い付いた。

満足して息をつく頃にはアリスちゃんのおっぱいは
僕の唾液まみれだった。濡れて光る乳輪と乳首がまた
この上なくいやらしい。
これだけおっぱいを舐られてもアリスちゃんは
寝息も変わらずぐっすり寝たままだった。



ここまで来たらもう止まれなかった。
アリスちゃんのおっぱいを余すところなく
愉しむため：フル勃起したチンポを晒すと
アリスちゃんに馬乗りになり：その胸でチンポを
挟み込んだ。パイズリである。

アリスちゃんの爆乳は難なくチンポを包み込んで
隠してしまった。

「すごいよアリスちゃん：まだ△学生なのに巨乳△
顔負けのパイズリが出来ちゃうなんて：！！」
両手で掴んだおっぱいの感触を楽しみながら
ゆっくりと抽送を始める。



ゆっくり腰を前後に動かすと、今までに味わったことのない快感がチンポを襲う。
柔らかくて、むにむにとした乳肉の感触。
そして何より寝ているアリスちゃんのおっぱいを好き勝手にして犯しているという背徳感が異常な興奮を誘い：それがまた快感を増幅させる。

胸の谷間があつという間に先走りまみれになり、ぬちゃぬちゃと粘ついた音が聞こえてくる。

射精感が登ってくるのにそう時間はかからなかった。このまま思いつき射精したい、それだけ考えてひたすらおっぱいでチンポをじごき、ほどなくその瞬間は訪れた。





「うう…っ！」
身体を硬直させると痛いぐらいの勢いで精液が発射され、アリスちゃんの顔に飛び散った。
無論一度では終わらず、何度も吐き出されるたびにアリスちゃんのかわいい寝顔が精液で汚されていく。

あまりの興奮と快感で射精が終わったあともしばらくそのままの姿勢で動けなかった。荒れた息で下を見るとおっぱいにチンポを挟んだまま精液まみれになったアリスちゃんが居た。まだ興奮もチンポもまったく収まってはいない。
まだだ。もっと。もっとこの快感を味わいたい。



再びパイズリを再開すると今度はパチンパチンと音がするほどおっぱいに激しく腰を打ちつけ、挿入を繰り返した。
「ああ、すごく気持ち良いよアリスちゃんのおっぱいオナホ……！」

大量の先走りと精液で更に大きくなった粘液質な音も部屋に響く。その時の僕は文字通りおっぱいをオナホ代わりにして射精することしか考えていなかった。そして再び射精感が訪れると躊躇なく開放する。





再び大量の精子がアリスちゃんの顔に降り注ぐ。
そして、今度は谷間からチンポを取り出し、手で
しごきながら欲望のままアリスちゃんのおっぱいに
精液をぶちまけた。
乳首に亀頭を擦り付けながらもどくどくと精子が
溢れてきて、あまりの快感に全身が震えていた。

気がつけばアリスちゃんの上半身は顔から胸まで大量の
精液まみれだった。
「はあ…はあ…最高に気持ち
よかったよアリスちゃん！」

じろあ…

あ　あ

じろ

興奮が収まってくると欲望に任せてとんでもないこと
をしてしまったという感覚がようやく出てきた。
何とか後始末をするとアリスちゃんの服を着せ直して
部屋を後にした。
その夜、僕は朝まで寝られなかった…。



あんなことをされたとも知らないアリスちゃんは次の日から変わらず僕と接してくれていた。
でも、僕はもうアリスちゃんを今までのように可愛い妹のような存在として見れず、完全に性の対象になっていた。一緒にいても隙あらば視線は豊満な胸元に集中し、あの夜の出来事が否応無く脳内再生され、再びアリスちゃんの身体を味わってみたいという衝動に駆られる。

(いくらおっぱいが大きいからってアリスちゃんはまだ△学生なんだぞ…
なに考えてるんだ僕は)
そう必死に理性で押さえつけていたが、ある日限界が来た。



その日もアリスちゃんの部屋にお邪魔していて、ご飯を食べたあとTVを見ていた。アリスちゃんは僕の隣で体育座りをしながらTVを見ている。無論無意識だろうが、抱えた足と身体に挟まれておっぱいが変形しいつもよりも上乳の部分が良く見え、深い谷間もはっきり出来ていた。僕はTVなど全く見ることなくずっとその胸元を凝視していた。

そこへアリスちゃんが声をかけてきた。

「どうしたの？お兄ちゃん」

くりくりした蒼い目が僕の視線と合う。

次の瞬間、僕は衝動的にアリスちゃんに飛びつき…



「アリスちゃん…っ！」
キスをしていた。僕にとっても、きつとアリスちゃんにとっても初めてのキスである。
アリスちゃんは何が起きたのか理解できずに驚いた顔で僕のなすがままにされていた。



「え…あ…っ」
戸惑うアリスちゃんに再びキスをする。
「んっ…おに…い…ちゃ…」
困惑した様子ながらもアリスちゃんは僕を拒まずされるがまだだった。

「好きなんだ…アリスちゃんが…」
そっぴいなからアリスちゃんの唇をついばみ、
体を抱きしめる。
「あ…わ…私……」



「わたしも…お兄ちゃんなら…」
そういつてアリスちゃんも僕の体に腕を回してきた。
「アリスちゃん…っ」
キスを続けながら胸に手を伸ばしてやわやわと揉みしだく。

「あっ!?…ん…」

アリスちゃんは身体をびくりとさせるがやはり拒んだりはいしない。
僕にされるがまだ。

「いいよね…っ?アリスちゃん…」

「う…ん」

消え入りそうな声でアリスちゃんが答える。

アリスちゃんを横たえるとあの晚のようにボタンを外し、インナーをまくり上げておっぱいを露わにした。また見たくて仕方がなかったアリスちゃんのおっぱい。

「ねえお兄ちゃん…私の胸…変じゃ、ない…?」
不安そうな顔でアリスちゃんが聞いてくる。

やはりこれだけ大きいと少なからずコンプレックスもあるのだろう。

「全然、おつきくて素敵だよ」

「ホントに…?」

「うん、アリスちゃんのおっぱい大好きだよ!」
そう言いながら両手でやわやわとおっぱいを揉む。



「あっ…ふああっ」
ぐにぐにとおっぱいを揉みしだくとそれにあわせて
アリスちゃんがかわいい喘ぎ声をあげる。

すっかり硬くなつた乳首を舐めると
さらに声が高くなる。

「ひゃっ…あっ…」
びくんと身体を震わせるアリスちゃん。

そんなアリスちゃんの
反応を楽しみながら
おっぱいを好きなように
揉み、舐めあげ、吸った。



「お…にいちや…あつ、ああ」
ねぶるような愛撫に、アリスちゃんは
声を上げっぱなしだった。

以前にした時以上の興奮に
股間は完全にギンギンに
なっていた。

アリスちゃんのスカートの中に
手を伸ばし、パンツ越しに
秘部をなでる。

「アリスちゃんと…ひとつになりたい…
いいよね?」

「…うん……」
こくとアリスちゃんも
頷いてくれた。
僕はようやくおっぱい
から離れるとアリス
ちゃんのスカートを
めくりあげた。



そしてパンツを脱がせると…
ぴったりした綺麗なスジが露わになり、
思わずつばを飲んだ。
これがアリスちゃんの△学生
お〇んこ…

アリスちゃんは恥ずかしい
のか、ぎゅっと目をつぶって
固まったように動かない。



アリスちゃんの脚の間に座り直すと痛いほど勃起した
チンポを取り出し、愛液の滲む縦スジにこすりつける。
「はぁ…はぁ…」
今からここにチンポを入れて
アリスちゃんとセックスするのかわ
思うと頭がどうにかなりそうだった。

いれ…

マン肉を広げて膣口を広げ
と亀頭を押し当ててる。
「アリスちゃん…最初は少
痛いけど、我慢できる?」
「……うん…」
不安そうなアリスちゃんの
返事。

どた

どた



アリスちゃんの脚の了承を得ていよいよ膣内に肉棒を侵入させていく。

当たり前だったがアリスちゃんの膣内はかなり狭かった。

「ん…あ、あ…っ！」

顔を歪めたアリスちゃんが小さな

悲鳴をあげる。でもかわいいそうだけど

止める訳にはいかない。

亀頭が膣内に隠れたあたりでアリスちゃんの

腰を掴んで固定すると一気にチンポを挿入した。

ぐぐ

ググッ

びしょ

びしょ

「あ…あっ…？」

急激なショックでアリスちゃんの顔が更に歪む。

「う…あ…はあっ…あ…っ…」

やがて涙を浮かべると破瓜の痛みに耐えるようにしていた。

ぎゅうぎゅうと締め付けてくるアリスちゃんの
暖かな膣内は、こんな気持ちがいいものが
あるのかと身体が震えるほどの
快感だった。

押し込んだチンポをゆっくり
引き戻すと、

「んっ…あ…っ…」

とアリスちゃんが押し殺した声を
あげる。

ゆっくりと挿入を繰り返すが
チンポを動かすたびに
凄まじい快感が襲ってきて
思わず射精しそうになるのを
何度もこらえたが…
もう限界だった。





強烈な快感とともに射精が始まり、
大量の精液がアリスちゃんの膣内に
吐き出されていく。

あまりの気持ちよさに夢中で腰を
密着させ、射精を促してくるかのように
締め付けてくる膣肉に包まれて
何度もちんぽを震わせた。

「あ…あ…っ」

体内に流し込まれてくる熱い
精液に反応して、アリスちゃん
も何度も身体を震わせていた。
「おなが…あつい…よおっ」



今度はアリスちゃんを抱きかかえて対面座位で始めた。
繋がったままのお〇んこは精液と愛液でぐちよぐちよですっかり
ぬかるんでいるものの、きつさは相変わらずだ。
アリスちゃんも感じ始めているのか顔はすっかり真っ赤にとろけきり、

△学生がしちゃいけないエロ過ぎる表情になっていた。

「はぁ……はぁ……おにい……ちゃん……あっ」

涙目とろれつの回らない舌で奏でる可愛いあえぎ声はいやでも肉棒を
刺激する。



いきおい、突き上げが激しくなり、粘ついた音の大きさが増す。
「ひゃっ、あっあっ」

身体が上下することによりアリスちゃんが喘ぎ声を上げる。
その声が聞きたくて、段々動きが荒っぽくなってくる。

「やっ、あっ……おにい……ちゃ……ああっ！」

更にぎゅっとしがみついてくるアリスちゃん。

強ばる身体は膣内も締め付けを増す。

まるで射精を促しているかのような感覚に、不意に射精感が
増してきた。それに逆らうことなく本能のまま動き続け――





一度出したというのに再び大量の精液がアリスちゃんの子宮へ流し込まれる。

「あっ…おにいちゃんの…また…っ」
精液を叩きつけられる度にアリスちゃんが震える。

やっとチンポが収まると二人ともふうっと息をついた。

「はぁ…はぁ…」

二度の膣内射精の気持ちよさにどうにかかなりそうだった頭も
ようやく落ち着いてきた。

アリスちゃんと繋がったままのチンポはまだガチガチだったが…

はぁ

あ

はぁ

はぁ

はぁ

「そろそろ止めないと…お母さん帰ってきちゃうからね」
「うん…」

アリスちゃんも名残惜しそうで少しうれしかった。

「アリスちゃん…明日一緒に風呂入らない？」

「おふろ…？うん…いいよ…」

「よかった、じゃあまた明日しようね」

そういつて軽くキスをする、精液まみれのお〇んこからようやく
チンポを引き抜いた。



次の日、約束とおり一緒にお風呂に入ることになった。
当然脱衣所で服を脱ぐが、自分で脱がした時と違って
アリスちゃんが脱いでいく光景も中々にいいものだった。

上着とスカートを脱ぎ、インナーも脱ぐとぷるんっと
きれいな爆乳が露わになる。本当にいいおっぱいしてるなあ...と
そこでふとあることに気づいた。



「そっついえばアリスちゃんて普通のブラはつけないの？」
僕の質問に、少し恥ずかしがりながらアリスちゃんが答える。
「その…前は着けてたんだけど、もう合うサイズのがなくなっ
ちゃったから着けてないの…」

なるほど、確かにアリスちゃんの小柄な身体に合うこんな爆乳
サイズのブラなんてその辺に早々売ってはいまい。
「ああ、そうか…じゃあ〇学生ときはブラ着けてたの？」
「うん…□歳の時に着けたのが最初…かな？」



うーん、さすがだ。まあアリスちゃんぐらい大きいともうその
ぐらいからブラ着けるほど成長しているのか：ちよっと見て
みたかったな…。しかしこんな色気の無いインナーじゃなくて
ちゃんとした下着姿のアリスちゃんも見てみたい。
ネットで探してみればきっとあるだろう。

「じゃあ、先に入って髪の毛洗ってるね」

そう言ってアリスちゃんが風呂の扉を閉めた後で僕もようやく
服を脱ぎ始め：ガチガチに反り返った肉棒を一応タオルで隠すと
風呂場へ入っていった。



アリスちゃんが身体を洗っている後ろで自分も洗う。
濡れて水の滴るアリスちゃんの身体を見ていると思わず
そのまま襲い掛かりたくなる衝動を覚えるが、ぐっと我慢する。

アリスちゃんが洗い終わって髪をゴムで縛りなおしたところで
声をかける。

「アリスちゃん、ちよっとこっち向いて」

「なに？」

そう言うって振り向いたアリスちゃんの顔先にちんぽを突き出した。

「ひゃっ?」

アリスちゃんは驚きながらも生まれて始めて見る勃起チンポから目を離さない。

「これがこの前アリスちゃんの中に入ってたんだよ」

「こんなにおっきいのが…ほんとに…?」



「アリスちゃん、これ手で握ってみてくれる?」

そうお願いすると、アリスちゃんは恐る恐る手を伸ばしてチンポに手を這わせた。

「うわ…すご〜くあつい…」
小さな手がチンポを包み、その感触に思わずぶるっとしてしまう。
アリスちゃんはチンポを握りながら興味津々と言った体で肉棒観察をしている。

アリスちゃんの手をさらに上から握り、軽く扱いて動かかし方を教えてあげた。
「こ〜やって手を動かしてみてくれる?」
「こ〜こ〜こ〜」
おずおずとアリスちゃんの手が前後し、手コキが始まった。



「うわ…すご〜くあつい…」
小さな手がチンポを包み、その感触に思わずぶるっとしてしまう。
アリスちゃんはチンポを握りながら興味津々と言った体で肉棒観察をしている。

アリスちゃんの手をさらに上から握り、軽く扱いて動かかし方を教えてあげた。
「こ〜やって手を動かしてみてくれる?」
「こ〜こ〜こ〜」
おずおずとアリスちゃんの手が前後し、手コキが始まった。



アリスちゃんの視線は肉棒に集中しながらも時々これでいいのかと僕の様子を伺うように上目遣いになる。

「いいよ…すごく気持ちいい…」

「気持ち…いいの?」

「うん、こうやってチンポ扱いて刺激すると男は気持ち良いんだよ」

「そうなんだ…」

言われたとおり一生懸命チンポをしごくアリスちゃん。上から見下ろしていると手を動かすたびにゆれる大きなおっぱいも目を楽しませてくれる。



「アリスちゃん…もっと気持ち良くしてほしいんだけどいいかな?」
「えっと…どうすればいいの?」
「ちょっとチンポの先を口でくわえたり舐めたりしてもらえる…かな?」
「え…っ!?!」

肉棒を見たときのように驚くアリスちゃん。

「だめ…かな?」

しばらくチンポを握ったままうつむいて動かないアリスちゃんだったが、顔を上げると口を亀頭に近づけていく。



「ん…」

小さな口が亀頭を半分ほどくわえ込む。

「いいよ…ありがとうアリスちゃん、すぐく気持ち良いよ」

亀頭に与えられた新たな刺激に加え、幼い顔立ちの△学生にチンポを咥えさせているという図が最高にチンポを刺激する。

ちゅぽ
ちゅぽ
ぽん

「うっ…アリスちゃん、もうちよっと深くチンポ咥えてもらえるっ…」
「ふ…ん…っ」

お願いに応え大きく口を開けてチンポを飲み込むアリスちゃん。
僕はたまらずその頭に手をやると軽く前後に動かす。

「んっ!?んっんんっ!」

アリスちゃんが少し苦しそうな声を出すがおかまいなしにチンポを前後させて暖かな口内の感触を楽しむ。

「はあ、はあ、アリスちゃん…っ」

げんげん

げんげん

じゅぽっ

じゅ

アリスちゃんのような子にチンポを咥えさせているという図は想像以上に興奮を掻き立てるものだった。

欲望のおもむくままに腰を前後させ、射精感を高めていく。

「んんんんんんん」

アリスちゃんは健気にもそれを受け入れ、必死でチンポを咥えてくれていた。高ぶった興奮はやがて限界を迎え――

僕はそのまま、アリスちゃんの口内で勢いよく射精した。
ドクドクと小さな口に流し込まれていく精液。
「んんっ!?んぷっ、んんっ!」
いきなりの口内射精に驚くアリスちゃん。

僕が頭を抑えていたのでチンポからなかなか口を放せなかったが、
大量の精液に我慢できなくなったのか口を離してしまう。
が、射精はまだ収まらず、チンポが脈打つたびにアリスちゃんのかわいい顔に
精液がぶっかけられていく。

「はあっ、はあっ、はあ……」

ようやく射精が収まるころにはアリスちゃんの顔は精液まみれだった。



「ごめんアリスちゃん…気持ちよすぎた…」
「けほっ…そう、なんだ…気持ち…よかったの？お兄ちゃん…」
「勿論だよ」
そう言ってアリスちゃんの頭を撫でてあげた。



一発出してもまだまだ肉棒はガチガチだった。

「アリスちゃん、ちよっとそこの壁に手をつけてお尻こっちに向けて」
「え…こう…?」

アリスちゃんが言われたとおりの格好を取ると、チンポをつかんで近づいていった。

不安げな表情でお尻を突き出すアリスちゃん。
少し大きめのお尻と割れ目が目に入ってくる。
バクバクする心臓を抑えながら右手でチンポを
つかむとおんこにあてがう。そして左手で細い腰を
掴み、ゆっくりと膣内に押し込んだ。

「ふう……ん……あっ」
アリスちゃんが押し殺した声を出してチンポを
受け入れていく。



本来まだ大人のチンポを迎え入れるはずのない
キツキツのお〇んこの感触はそれだけで射精
してしまいそうだ。
時間をかけてチンポをアリスちゃんの中に埋没させる。
フェラもよかったけど、やはりお〇んこの気持ちよさ
にはかなわない。

ズ
ど

しばらくその感触を味わうと入れたときのように
ゆっくりチンポを引き抜き、抽送を開始した。
「動くよアリスちゃん…」
出し入れにあわせ、アリスちゃんが
可愛いあえぎ声をあげる。



アリスちゃんは歳の割りにおっぱいが滅茶苦茶大きいのに、背は小柄と言っているいいほうなので、こうやって後姿しか見えないと下手をすれば〇学生を犯しているような錯覚さえ覚えてしまう。

ズグッ

ズッ

ゆっくりと一定のテンポで腰をうちつけるとそれに合わせてアリスちゃんが声を上げる。「あっ、あっ…おにいちゃん…んっ」アリスちゃんも慣れてきたのか、声に苦しそうなところもないようだ。



「アリスちゃん、これ気持ちいい？」
パチンパチンと音を立てて腰をピストン
させながら聞くと、
「うん…っはあ、気持ち…いいよお…っ」
と、アリスちゃんが答える。

やっぱり、もう感じ始めているようだ。
そう思うと腰を動かす速度が上がり、
それにつれてアリスちゃんの身体も
前後に大きく揺れ、下にぶら下がった
おっぱいも派手に揺れる。



「はあ、はあ、アリスちゃん…一緒にイこう」
とめどめなく愛液を垂れ流し締め付けてくる
お〇んこに、射精感が次第に高まってくる。
華奢な腰をがっちり掴むと射精に向けて
がつつと腰を動かす。

「あつ、ひゃつ、ああつ」

アリスちゃんも声のトーンが高くなり、
膣肉がまるで射精を促しているかのように蠢く。
もう我慢は限界だった。
「ああつ…出すよアリスちゃんっ！」





「あっ……あ……っ」

アリスちゃんもイったのか、ひとときわお○んこの締め付けがあがる。

がっちり密着した子宮口へ、勢いよく精液が発射されていく。昨日もそうだったが、やはりこの膣内出しの快感は最高だった。

射精そのものの快感もさることながら、アリスちゃんのような可愛い△学生の子に膣内出ししているという背徳感が興奮度を倍増させている。



「アリスちゃん、気持ちよかった？」
「う…ん…」

はあはあと息を整えながらアリスちゃんが答える。
ずるりと肉棒を引き抜くと少し遅れて開いた
膣口からごぼりと大量の精液が溢れ出てくる。

アリスちゃんの身体を改めて洗ってあげ、
一緒に湯船につかる。

その後も軽くアリスちゃんの身体に
触れながらその日のお風呂タイムは
終わったのだった。



その日、早めに仕事が終わった僕は帰宅途中、家の近くで同じく下校中のアリスちゃんとはったり会った。
「あれ？お兄ちゃんも帰るところなの？」
「うん、今日は早かったんだ」



そんな何気ない会話をしながら近所の公園の前を通る。
…ふと、公園に目をやりながらある事を思いついた。
「アリスちゃん、ちよっと公演に寄ってかない？」
そう言っアリスちゃんの手を引く。
「え？公園に？」

戸惑いながら僕に引つ張られて付いてくるアリスちゃん。
目当ての場所は少し奥まったところにあった。
公衆トイレである。

「ほら、ここに入って、誰も見てないから」
「えっ？えっ？」



アリスちゃんが困惑するのも当然だ。僕が連れ込もうとしている
場所は男子トイレだったのである。

普段から人気の少ない公園はトイレの周囲にも誰もおらず、
見られている心配はないのは確認済みだ。

僕はそのままアリスちゃんの手を引いて個室に入り込んだ。

アリスちゃんを便座に座らせるとズボンから既に勃起しているチンポを取り出す。

「ほ、ほんとにここで…するの？」

初めての屋外プレイに躊躇を見せるアリスちゃん。対して僕のほうは公衆トイレの個室でのフェラというシチュエーションに、かつてない興奮を覚えていた。

ドキ
ドキ

じり

すっかりフェラ慣れしているはずのアリスちゃんだったが、まるで初めてフェラした時のように恐る恐るチンポを握り可愛い口ではつくりと咥える。亀頭と裏筋をかわいい舌で舐めまわされ、思わず呻いてしまう。

しかしアリスちゃんもいざ行為が始まると
そちらに夢中になるようで、だんだんと
動きがいつもどおりになってくる。

「ん…っ…んふ…んっ」

口いっぱいにはチンポをほおぼり、顔を前後に
動かしてちゅばちゅばと卑猥な音を立てる。



音は狭い個室内で響き、誰か他にいたら確実に
聞かれているだろう。

そんな秘め事の興奮がチンポの感度を押し上げ、
いつもより早い限界の訪れを感じた。

「そろそろ出すよアリスちゃん…っ」
僕が限界を告げると、アリスちゃんは前後運動を
早め、更にじゅぼじゅぼと音を立ててチンポを
吸い上げて射精を促してくる。

「んふ…っ…んっ…んぶっ」

そんな淫らで健気な奉仕にすぐに限界に達した
僕は、欲望のまま小さな口内に思いっきりの射精した。

「んんっ!?!ん…ん…っ!」

どどどくと吐き出される精液。それをアリスちゃんは
飲み下しながら口内射精に耐えていた。

こんな場所で△学生にごっくんフェラをさせていると
いう現実には、背徳感と快感で背筋が震えながら何度も
精を吐き出した。



長い射精が終わってようやくチンポを口から離す
アリスちゃん。その口周りもチンポ同様に精液まみれ
だった。

「っはあ……はあ……」

「すごく気持ちよかったよ、アリスちゃん……」
頭に当てた手でそのままアリスちゃんを撫でてあげる。
が、硬いままのチンポと同じく、まだこれで終わらせる
気はなかった。

「……」でするよ、アリスちゃん」
そう言いながらアリスちゃんを立たせて壁に
押し付ける。

「えっ……!? おにいちゃん……やあっ!」
そんな声を見無視してアリスちゃんに後ろから覆い
かぶさり、服を剥いでいった。



半裸になったアリスちゃんの乳首はすでに硬くなっており、お○んこも愛液に湿っていた。

少なからずアリスちゃんも感じていたのだ、という事実にますます興奮し、いきり立った肉棒をあてがうと一気に膣内へ押し込んだ。

幾度ものセックスですっかりチンポに馴染んだお○んこは、締め付けは相変わらずなもの易々とチンポを飲み込んでいく。

「やつ…あぁっ…あ…っ！」

アリスちゃんは必死に声を抑えているが感じているトーンは隠しようもない。

ぬぢゅ

ストイク

腰をがっちり掴み、根元までチンポを突き入れて狭い膣内の感触をしばらく楽しむと、ゆっくりとピストンを始めた。

ふしゅ
がるる

「んっ、あっ…だめえ…っ」
子宮口を突くたびにアリスちゃんが小さな悲鳴をあげるが
僕はお構いなしに夢中で腰を振っていた。
女子△学生を公衆トイレに連れ込んで無理やり
服を剥いで犯すなどどう見ても強姦魔の所業である。
そんな異常なシチュエーションに僕はすっかり
興奮していた。

バチンバチンと肉同士がぶつ
かる音が個室に響き、粘膜が
擦れ合う湿った水音も同時に
響いていく。

「やっ…おにいちゃん…っ
わたし…あああっ！」

嫌がりつつアリスちゃんも感じているのは膣内の反応と紅潮した顔を見ればわかる。

愛液の量はむしろいつもより多いぐらいで、まるでフェラの時のような粘っこい音をたてていた。締め付け具合もいわずもがなで、今すぐ精液が欲しいと言わんばかりに肉棒を刺激してくる。

あっという間に高まってくる射精感を抑えることはせず、がつがつと腰を振った。

「あ、あっ…んっ」

されるがままになっているアリスちゃん。その膣内に――





あー

あー

あー

んんん

んんん

んんん

んんん

んんん

んんん

んんん

んんん

んんん

んんん

んんん

んんん

「あ、あゝゝゝっ！」
限界まで突き入れた肉棒から勢いよく精液が子宮に叩きつけられると同時にアリスちゃんもイったようだ。一層膣肉がうねり、射精はとどまることを知らず幾度も精液が子宮に流しこまれていった。

今まで最高レベルの快感に背筋を震わせながら、僕は射精の余韻に浸っていた。
「はあ、はあ、はあ…」
少し息を落ち着かせると改めてアリスちゃんに覆い被さった。

アリスちゃんの小柄な体を抱きしめるように手を伸ばし、そこにぶら下がっている大きな乳房を揉み上げる。「やつ、おにいちや：ああっ！」乳首をつまむと突然の刺激にアリスちゃんが思わず悲鳴を上げる。

汗ばんだ乳肉をやわやわと揉みしだきながら耳元でささやくと同時に腰もゆっくり動かし始めた。「こうされるの大好きだったでしょ？アリスちゃん」実際アリスちゃんはおっぱいを弄られながらの挿入に一番弱かった。たちまち可愛い喘ぎ声上がる。

じゅわ
じゅわ

じゅわ
じゅわ

じゅわ
じゅわ

きゅわ
きゅわ

「あっ、やあっ、も…やめ…っあああっ！」
アリスちゃんはまだ声を抑えるのも忘れていつもの
トーンに戻りつつあった。
先ほど大量に出した精液が出し入れのたびに
ぶちゅぶちゅと零れ落ち、一層淫靡な水音を
たてる。

「あっ、あ…っ…おにいちや…っ」
「アリスちゃん、チンポ気持ちいい？」
「うん…っきもち…あっ…いいよお…っ」
すっかり発情した声でアリスちゃんが応える。



「いいの？そんな声出してたら誰かに聞かれちゃうよ」
「でも…っは、あ、もうがまんでき…あっ！」
今や狭い個室トイレには、腰がぶつかる肉の音、接合部からの粘液音、そしてアリスちゃんの喘ぎ声がこだま
していた。
手に余る爆乳を弄びながら、アリスちゃんをひたすら
犯す。

「アリスちゃん……そろそろ出すよ……っ」
「う……んっ……わたし……もっ……ああっ」

射精感が高まるにつれ、膣内の締め付けも再び増してくる。
 バツンバツンと激しく腰を打ち付け、亀頭を子宮口に押し付けると――



「やっ、あっ…あ…おにいちちゃんの…でてるよお…っ」
チンポがびくついて射精すると、アリスちゃんも
絶頂した身体をびくつかせ、膣肉を締め上げてくる。
その度に呻きたくなるほどの快感がチンポを
襲い、僕は何度も射精した。

ようやく落ち着いて一息入れると粘液まみれの肉棒をずるりと引き抜いた。

散々責めたてられてパクリと開いた膣口からぶちゅぶちゅと卑猥な音とともに大量の精液がこぼれ落ちてくる。

「はーっ、はあー……はあっ……」
アリスちゃんが息をつくたびに膣口がひくつき、
精液の塊が膣内からはき出されてくる。
「アリスちゃん……気持ちよかった……?」
「う……ん……」
火照った顔でアリスちゃんが答えた。

名残惜しそうにもう一度身体をまさぐってから
アリスちゃんから離れる。後始末を終え、服を整えると
周囲を確認してトイレから出た。
またここでやりたいな……そう思いながら一緒に帰途へ付くのだった。

じゅ
じゅ
じゅ

じゅ
じゅ
じゅ

びゅ
びゅ
びゅ

その日のアリスちゃんの格好は、いつもと違ってちゃんとした
薄いピンクの下着にガーターベルトだった。先日僕がプレゼントしたものを
着てくれたのだ。

「お兄ちゃん…ど、どう…？ 似合う…？」

「うん、すごく似合ってるよ」

たが

世キ
世キ

そう言いながらアリスちゃんに口づけし、ブラの上から胸を揉んだ。
ブラに包まれたおっぱいはいつもより大きさも弾力も増したようで
普段とは違った感触を存分に楽しんだ。



「んっ…あ…っ」

僕が手を動かすたびにアリスちゃんが声を上げる。
ブラでしっかりと包まれた乳房は当然いつもより大きく盛り上がり、
弾けんばかりの肉感とたっぷりした量感は今までとはまた違った
興奮を与えてくれた。

「はあ…んっ…ああっ！」

手に余るおっぱいをぐにぐにと強く揉みしだいてもアリスちゃんには
もう快感にしかならない。

そんな顔を紅潮させたアリスちゃんの目の前にガチガチになった肉棒を
取り出した。



「おっぱいで挟んでくれる?」

「うん…いいよ」

アリスちゃんが腕でおっぱいを寄せると深々とした谷間が出来上がった。そこへ遠慮なくチンポを差し込んでいく。いつもより圧を増した谷間はまさにおっぱいの凹みだった。

ずりずりとゆっくり腰を動かす。汗ばんでしっとりした感触の谷間はぐんぐんと溢れ出す先走りですぐにぬめり、滑りが良くなっていった。

ん

ぎゅ

ビ

ッ

ビ

ッ

「んっ…んしょ…」

アリスちゃんも慣れたもので、僕のピストン運動に合わせてチンポが外れないようおっぱいの位置や圧力を調整してくれる。そのたびにチンポに新しい刺激が加わるのが何とも気持ちいい。

「お兄ちゃん…そろそろ出そうっ?」

チンポの状態やの匂の動きから察したようにアリスちゃんが聞いてくる。

「うん…そろそろ…っ」

返事を受けて、アリスちゃんがさらに乳圧を高めてくる。



限界までパツパツになった谷間にせわしなくチンポを突き入れる。
アリスちゃんは挟み方を強めるだけでなく交互に上下へ動かして
チンポを擦ってくる。

「お兄ちゃん、どお…？気持ちいい…？」

僕をイかせようとしながら上目遣いで聞いてくるアリスちゃんに、
答えるより先に限界を迎えたのだった。



おっぱいの間でビクビクと跳ねながらチンポが射精を始める。
「やっ、あっ…あ」

射精の間もアリスちゃんは乳圧を緩めることなくチンポを
挟み続け、大量に吐き出されていく精液を谷間で受け止める。

爆乳△学生の弾力あふれるおっぱいの谷間はさながら膣内のように
気持ちよく、僕は快感のまままたっぷりと射精してアリスちゃんの
おっぱいを白濁色に染めた。



「ん…いっぱい出たね…おっぱいが熱いよ…」
依然としてチンポをパイズリしたまま、制液まみれの谷間を見て
アリスちゃんがつぶやく。
上にも溢れているくらいだから、見えないところは精液でぐちゃぐちゃ
だろう。

しかし、それだけ出してもまだチンポは満足していなかった。
谷間からチンポを引き抜くと、アリスちゃんをゆっくり押し倒して
覆い被さり、下着を剥ぎにかかった。



ブラをずり下げ、ショーツを脱がせて足を開かせる。
ピンク色の乳首は大きく自己主張し、年相応の綺麗な
おま〇こは愛液をにじませていた。

両手でおっぱいを鷺掴みにしながら乳首を吸い立てる。
「あっ……んん……あ、あっ！」
乳首を舌で舐めまわし、吸い、甘噛みする。その度に
アリスちゃんは可愛い喘ぎ声で反応してくれた。



ぬめった割れ目をなぞり、指を侵入させる。
膣内に指を半ばまで埋めると軽く動かす。

「ひゃっ…あつー！」
それに対してアリスちゃんが大きく体を跳ねさせる。

しばらく口と片手でおっぱいを、片手でおま〇こを
弄り回し、アリスちゃんの身体を堪能した。
そしていったん身体を離すとギンギンになった
肉棒を取り出し、ぬかるんだおま〇こに挿入していく。



「ん…っおにい…ちゃ…っ！」
小さなおま○こがいつぱいに開いてチンポを飲み
込んでいく。亀頭が子宮口に届くまで腰を突き入れた。



「ふう…やっぱり気持ちいいよアリスちゃんの膣内…」
チンポを膣内に埋没させたまま、その刺激と温かさを
味わっていた。

「わたし…も…っ…お兄ちゃんの…気持ちいいよお…」
アリスちゃんも恍惚とした表情で応える。

ゆっくりとピストンを始めると結合部からぬちゃぬちゃと音が響く。締め付けてくる肉壁をかき分ける度にぞくぞくとした快感を覚え、次第に速度が増してくる。



「んっ、あっ…あっ…」
チンポの動きに合わせておっぱいがびるびると揺れ、アリスちゃんが喘いだ。
腰を動かしながらおっぱいに手を伸ばして乳首を摘まみ、互いの快感を高めていく。

「ああ……っ……ん……おにいちや……わたし……っ」
アリスちゃんももう限界が近そうだ。
膣肉の締め付けがたまらない感触になってくる。

僕も動きを早めて小刻みにチンポを突き入れた。

「あっ、あっ……あんっ……あっ」

子宮口に亀頭が押し付けられる度にアリスちゃんが
悲鳴を上げる。そして最後は思いつきり密着させて――





射精の快感に震えながらアリスちゃんの子宮に
精液をどくどくと流し込んでいく。
ほぼ同時にイッたおま〇こが精液を搾り取るかの
ように蠢いてくる。

ようやく射精が終わると、絶頂の余韻に浸っている
アリスちゃんに覆いかぶさり、キスをした。
「はあ…んっ…おに…いちゃ…んんっ！」
そして乳を揉みながらまた抽送を再開する。その夜は
僕の部屋で、アリスちゃんと何度も交わったのだった。



「どお…っ気持ちいい？」
アリスちゃんが手「キをしながら尋ねる。
「うんっ…いいよっ…」
おっぱいをしゃぶりながら答えた。
今のアリスちゃんのおっぱいからは
母乳が出てくるようになってる。
そう、アリスちゃんは妊娠して
いるのだ。



お腹もすっかり大きくなり、おっぱいもさらに一回りサイズを増している。母乳が出るようになってからこうやって授乳手コキプレイをよくしてもらうようになった。乳首に吸い付きながらチンポをしごいてもらうというのはなかなかやみつきになる気持ちよさだった。



「んゝ、そろそろかな？」
アリスちゃんもすっかり慣れたもので、
僕の状態から射精が近いことを察して
手の動きを早めてくる。
それに応えるように僕も強めに
乳首を吸いたてて母乳を飲む。
やがて限界が訪れ――



チンポから勢いよく精液が発射される。
「んっ…あっ…」
チンポを握っているアリスちゃんの手
に精液が降りかかる。
どくどくと精液を吐き出し
終わるとようやくおっぱい
から口を離れた。



「ふう…じゃ、今度は二人で気持ちよくなろうか」

そう言って起き上がると、重くなったアリスちゃんの身体を抱き上げて後ろからチンポを突き入れる。

「あっ…おにいちや…っ！」

既にぬめっていたおま○こは抵抗なくチンポを受け入れていく。



アリスちゃんが妊娠したのが判って以来の久しぶりの
本番セックスだった。ヤッていない間もフェラやパイズリとかを
してもらっていたが、やはりこのおま○この気持ち良さには
かなわない。

背後からおっぱいを鷺掴みにすると乳首から
母乳が噴き出てくる。
そうして、ゆっくりとアリスちゃんを突き始めた。



「あっ、ああっ、おにいちちゃんのっ…あんっ」
僕が突き上げることにアリスちゃんが喘ぎ声をあげる。
アリスちゃんにとっても久しぶりの本番はかなり刺激的なようだ。

ぐちゅぐちゅと音を立ててチンポが膣内を上下する。
ゆっくろとしか動けないのがもどかしい。



「ああ…やっぱりアリスちゃんのおまのこ気持ちいいよ…」
絡みつく贅肉の感触を味わいながらチンポをゆっくり動かす。
ずっじりと張ったおっぱいの感触も気持ちいい。

「はぁ…ああっ…ああっ…」
アリスちゃんの声のトーンが次第に高くなってくる。
僕も可能な限り強く、早めに腰を上下させて快感を高めていく。

あー
はぁ
びゅ
ぐ
ズ
グ
ズ
グ

「ああ…やっぱりアリスちゃんのおまのこ気持ちいいよ…」
絡みつく贅肉の感触を味わいながらチンポをゆっくり動かす。
ずっじりと張ったおっぱいの感触も気持ちいい。

「はぁ…ああっ…ああっ…」
アリスちゃんの声のトーンが次第に高くなってくる。
僕も可能な限り強く、早めに腰を上下させて快感を高めていく。

あー
はぁ
ぐに
ズッ
バグッ
ズッ

「ああ…やっぱりアリスちゃんのおまのこ気持ちいいよ…」
絡みつく贅肉の感触を味わいながらチンポをゆっくり動かす。
ずっじりと張ったおっぱいの感触も気持ちいい。

「はぁ…あぁっ…あっ…」
アリスちゃんの声のトーンが次第に高くなってくる。
僕も可能な限り強く、早めに腰を上下させて快感を高めていく。

はぁ
あぁ
ぐに
ズッ
バグッ
ズグッ

そうして次第に射精感が高まってくる。

「うっ…そろそろ出すよアリスちゃん…っ！」
がっがっ動きを早め、大きく突き上げたところで思いっきり射精する。

「あっ、あ、あ~~~~っ！」

アリスちゃんもイったのか膣肉がギュッと締まる。
何度もチンポがびくつき、膣内に精液が溢れかえった。



アリスちゃん、荒く息をついて肩を上下させる。
後ろから抱きしめ、やわやわと胸を揉みながら再びチンポを動かし始めた。

ゆるゆるとアリスちゃんを責めながら、ずっとこんなアリスちゃんとの生活が続けば良いなと思うのだった。